シンポジウム

獨協大学 DOKKYO UNIVERSITY

UNIVERSITÄT BONN

Japaninstitut「日本研究所」(ベルリン) 設立 100 周年を考える

Japaninstitut(日本研究所)が 1926 年 12 月 4 日にベルリンに設立されて、ちょうど 100 年を迎えます。第一次世界大戦で戦火を交えた日独両国は 1920 年代、急速に関係改善を果たしました。戦後すぐから数多くの日本人研究者や哲学者、画家、音楽家が堰を切ったようにドイツを訪れる一方、ドイツからはアインシュタイン(1922 年)やフリッツ・ハーバー(1924 年)といったノーベル賞受賞者が来日して大フィーバーを巻き起こします。とはいえ、それまで世界のトップを走ってきたドイツ学術は敗戦や制裁、大インフレの影響で窮地に立たされます。そこで日本からも多額の献金がドイツに送られ、関係改善がさらに進みました。その象徴が、ベルリンの「日本研究所」、そして翌 27 年東京の「日獨文化協會」の設立でした。

近年、日独交流 150 周年、160 周年といった区切りの年が訪れるたびに盛大な周年事業が行われています。ドイツ学術交流会(DAAD)も昨年 100 周年を祝いました。しかし、その DAAD と軒を並べてベルリン王宮内に設立された Japaninstitut について、今日語られることはほとんどありません。1920 年代の新たな日独交流に向けてハーバーやゾルフ大使、後藤新平や星一らの尽力により、大きな期待をこめてたちあげられた日本研究所も日獨文化協會も、その後日独文化協定(1938 年)、日独伊三国同盟(1940 年)と進む両国関係の中で翻弄され、20 年足らずで戦火の中に消滅することとなったからです。

これらの組織は、しかし活発な文化・学術交流活動を続けました。日独関係の歴史全体を眺めても、文化交流はこの時期が最も活発だったと言って過言ではありません。このように文化・学術交流を支える多大の貢献を行なって両国の国益に奉仕しようとした「日本研究所」や「日獨文化協會」がほぼ忘却されているのは、何を間違えたからなのでしょうか? 苦悩を重ねた末に破綻したこれら最初期の対外文化交流機関の歴史は、そもそも忘却されてしまってよいものなのでしょうか? 例えば *cool Japan* などを掲げて行われる現在の日本の文化交流事業には、当時の失敗から学ぶべきものはないのでしょうか? そもそも国が暴走するとき、対外文化交流機関には破滅への道をともに歩む以外の選択肢はないのでしょうか? このシンポジウムでは、誰にも祝われることのない設立 100 周年を迎える日本研究所および日獨文化協會の歴史をあえて振り返り、顕彰すべきは顕彰し、先人たちの失敗から学ぶべきことは謙虚に学んで、対外文化交流の意味と果たすべき役割について改めて考える機会としたいと思います。

獨協大学とボン大学による私たちの国際共同研究プロジェクトは 2 年計画で活動を開始したものです。今回の最初のシンポジウムでは、ボン大学とオンラインで結び、関心を持つ多くの方々と事実関係を確認しながら、まずは問題提起を行いたいと思います。多数のご来場をお待ちしています。

日時 2026 年 12 月 4 日(金) 16 時~19 時

場所 獨協大学 W 棟 2 階 W-205 (最寄り駅: 東武伊勢崎線、獨協大学前駅下車、徒歩 15 分)

☆ 参加ご希望の方、とりわけオンラインでの視聴を希望される方は こちらから事前にお申し込みください:(右の QR コードです)

https://germanistik.jp/japaninstitut

パネリスト (使用言語は日本語のみです)

獨協大学: 相澤 啓一:「日本研究所の歴史を振り返る」

安松 みゆき(別府大学文化財研究所客員研究員):

「日本研究所とドイツにおける日本美術展」

山本 淳:「獨協学園史における戦間期」

ボン大学: Daniel Gerichhausen:「トラウツとユーバーシャールの日本研究所構想」

湯川 史郎:「トラウツ所長時代の日本研究所」

Reinhard Zöllner:「伊東忠太とベルリンの日本研究所」



後藤 新平
（日獨文化協會初代総裁）



星 一 と フリッツ・ハーバー夫妻
（F.ハーバーは日本研究所初代総裁）



ゾルフ大使
（日本研究所第2代総裁）



F. M. トラウツ
（日本研究所初代ドイツ側所長）

「日本研究所」開所式（1926 年 12 月 4 日）でのフリッツ・ハーバー総裁の挨拶から

「お集まりの皆さま、私が長を勤める理事会を代表して、「ドイツと日本の精神生活についての相互知識と公共施設を促進するための研究所」、これを短く「日本研究所」と呼んでいますが、この「日本研究所」の開所式にお集まりいただき、ありがとうございます。

こうした研究所を設立してはどうかという考えを、私は昨年初め日本から帰国した際に持ち帰りました。ドイツ外務省や内務省、それにプロイセン文部省の温かい関心のおかげで、研究所設立は公的資金を得て実現するに至りました。

研究所設立については、日本帝国政府が東京に同様の研究所の設置を保証するか次第で決定することとなりました。そして私たちの名誉会員である東京のドイツ大使ゾルフ博士、日本国国務大臣の後藤新平子爵、本多熊太郎前在ベルリン日本帝国大使といった方々が、日本帝国政府の了解を取り付けてくださいました。今、この地の日本研究所が設立されて業務開始の運びとなり、来年には東京のドイツ研究所が続く予定です。

日本研究所は予算が限られているため、ここベルリン王宮の中に僅かな部屋しか借りられませんでした。しかしここには、日本の友人の星一氏のご寄付のおかげで、数は少なくとも優秀な人材とかなりの重要書籍が門出にあたって備わる予定となっています。〔…〕」

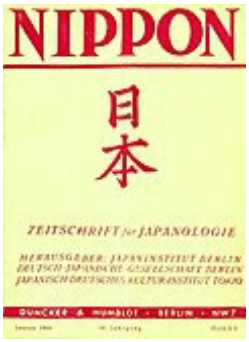


ベルリン王宮

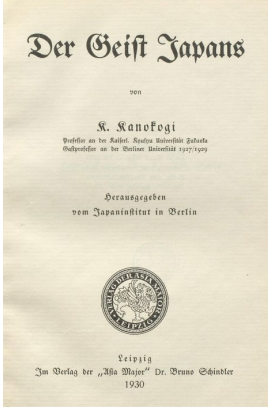


← 日本古美術展（1939 年） ポスター （横山大観 画）

日本研究所
発行誌『Nippon』



鹿子木 員信
（日本研究所第2代
日本側所長）著書





マルティン・ラミング
（日本研究所第2代
ドイツ側所長）